「ミサゴのくる谷」

ジル・ルイス 作
さくまゆみこ 訳

大好きな鳥たちを守るために

六年　村田陽香

私は鳥が大好きで、鳥を見つけるとついつい観察してしまいます。通学路のそばの川で流れに逆らって一生懸命に泳ぐ鴨や、富士登山で見かけた、空気のうすい七合目で元気に飛びまわるウグイスなど、たくさんの鳥たちが人と共存しています。しかし人間の捨てたプラスチックごみが原因で、たくさんの鳥が命を落としているという二ュースを最近よく耳にし、心を痛めています。

この本の主人公の少年カラムは、自分の農場にミサゴという渡り鳥が巣を作っていると クラスメイトから秘密を打ち明けられます。カラムの住むスコットランドでは絶滅の危機に瀕している、とても貴重な渡り鳥です。カラムはそのミサゴに「アイリス」と名付けて クラスメイトと二人で見守りますが、ある日アイリスは捨てられた釣り糸が足に絡まり大けがをしてしまいます。そのけがのせいで、

アイリスは渡った先のアフリカで飛べなくなってしまい、生死をさまよう状態となってしまいます。その事を知ったカラムは、信頼できる大人や友人の協力を得て、遠いアフリカでアイリスを助けてくれるような人をインターネットを使って自ら探し出し、実際にアイリスを保護してもらう事に成功し、元気に飛び立てる様になるまで自分の代わりに見守ってもらいます。私は、カラムがこの様に遠く離れた国の見ず知らずの人達に一生懸命に働きかけて、一羽の鳥を守ろうとする積極的な姿にとても感動しました。

この本がきっかけとなり、鳥とプラスチックごみの事に興味を持ち、この夏休みにプラスチックごみを減らして野鳥を守ろうというセミナーに参加しました。そのセミナーでは、アイリスを傷つけた釣り糸の様に、人間が捨てたプラスチックごみがたくさんの鳥を傷つけているという事実を再認識しました。

釣り糸や漁で使う網に絡まり、飛ぶこと

や歩くことが出来なくなってしまう事。食べ物のにおいが吸着したプラスチックを食べ物と勘違いして摂取し、栄養が摂れなくなって死んでしまう事。人間の便利な生活を支えるプラスチックが、鳥をはじめ、クジラやアザラシなどたくさんの生き物たちをも傷つけているのです。

この様に問題となっているプラスチックは、一方で私達の生活に深く浸透していて必要な可燃な物となっています。だから私は、大好きな鳥をはじめとした生き物を守る為に、プラスチックごみを減らす事に取り組もうと思います。マイバッグを持ち歩く、個包装になった物より大袋の物を選ぶなど。私たちが出来る事はたくさんあります。一人の力では足りませんが、カラスの様に積極的に周りに呼びかけ、たくさんの人達を巻き込んで環境改善につなげていきたいです。